

吉備国際大学
社会福祉学部研究紀要
第13号, 155 - 161, 2008

「越境」の試み ——多和田葉子とリービ英雄の場合——

清水 光二

The Attempt to Cross the Border

Koji SHIMIZU

Abstract

Yoko Tawada lives in Germany and writes her novels both in German and in Japanese. Levy Hideo lives in Japan and writes his books in Japanese. Both of them decided for themselves to express themselves in the non-mother tongue language. When they try to cross the border of the languages, they show us some issues of our current understanding of the languages. For example, in Japan we usually use these words without a doubt: "the motherland's language", "the mother tongue" and "a native speaker". We believe they are all completely stable ideas. But if you move out of the mother tongue and live in a non-mother tongue language like Yoko Tawada and Levy Hideo, we would know these words are kind of arbitrary ideas. They are all derived from the modern conception of the "nation-state". Yoko Tawada and Levy Hideo don't believe that the language belongs to only the native speaker. In their opinion, it belongs to the people who commit themselves to it the most. Yoko Tawada insists that she is making the history of the German language through writing her novels in German. And Levy Hideo believes that he writes his books in Japanese to enrich the Japanese language.

Key words : Motherland 's Language, Mother Tongue, Native Speaker, Possession of the Language

キーワード : 母国語、母語、ネイティブ、言葉の所有権

多和田葉子はドイツに滞在しながら、日本とドイツの両方でそれぞれの言語を用いて作品を発表し続けているという稀有な作家である。他方、リービ英雄はもともとは「万葉集」を初めて英語に翻訳したという日本文学研究者であったが、現在は日本に滞在しながら日本語で小説やエッセイを執筆するという日本語作家ともなっている。両者は共に「母語」

以外の言語で執筆することを自らの意思で選択したわけだが、ここでは彼らの「越境」の試みを通して見えてくる、現代の様々な言語上の問題を検討することにする。

★

今の時代でも、街の英会話教室の講師は白人のネイティブでなくては都合が悪いらしい。そういう話をまだ耳にする。営業的にそうでないと顧客(生徒)が集まりにくいというのがその理由なのだろうが、私たち日本人はいったい「英会話講師」という存在に何を期待し、その何にこだわっているのであろうか。

それに関連して多和田葉子は、自著のエッセイの中で『車に轢かれた犬』という映画のあるシーンを引き合いに出してみせる。映画は、日本に暮らす西アフリカ出身のある日本文化研究者についての話だ。

フランス語を教えるアルバイトをしようとして広告を出すと、希望者の若い日本人女性が家に訪ねて来るが、彼がアフリカ人であるのを見ると驚いて走って逃げて行ってしまふ。このシーンは、日本人が「フランス語」というものに背負わせている屈折した願望と、劣等感から来る自覚症状のない不安を鋭く照らし出しているように思った。

「自分たちはアフリカ人と同じくヨーロッパ人が勝手に野蛮人と見なしていたアジアの人間であるが、今は金持ちになったので、そのお金で高い授業料を払ってフランス語を習うことで、野蛮人ではないことを再確認したい」と無意識に思っているのに、よりによって野蛮人と思われ続けた被害者の代表とも言えるアフリカ人がフランス語の教師として姿を現したので、あわてて逃げていったのだろう。これはつまり、日本人はヨーロッパの野蛮観をなぜかそのまま受け入れてしまったということになる¹⁾。

英語であれフランス語であれ、私たち日本人が欧米の言語に何らかの屈折した思いを寄せていることに変わりはない。西洋の言葉を学習したいという気持ちの背後には、それらの言語に対する私たちの劣等感に由来する一方的な思い込みがしばしば隠されている。だが、そうした日本人の思い込みが、逆に

日本に滞在する欧米人の振る舞いに影響を与えていることもあるようだ。

リービ英雄は、日本語を話し、書くという微妙な「外国人」の立場からこのことについて次のように語っている。

日本語を喋り、書くことが日本人のアイデンティティだったとすれば、在日ではなく滞日の欧米人のアイデンティティは日本にいながら日本語を喋らないこと、英語を喋りつづけることにあった。それが、この島国に生きる彼らの生活の知恵であり、実際、職業でもあった。・・・現に、越境の意思を捨ててしまったほうが歓迎されることに気付き、上手に立ち回っている滞日外国人も多かった²⁾。

日本人が欧米出身の白人の外国人に特別のイメージを投影し、相手の方も都合よくそれに便乗して、例えば英会話教室の講師として金を稼ぐというこのグロテスクで滑稽な関係は、私たちが無意識の内に抱いている「母国語」、「母語」、「ネイティブ」、言葉の「所有権」といった近代の〈幻想〉に由来するものなのである。

*

最近あまり使われなくなった「母国語」という言葉は、外国語にはあまり見られない言葉である。私たちの大多数にとってこの国が母国であり、そこで話されている日本語は母国の言葉、つまり「母国語」であるという考えなのだろうが、これは日本という国が単一言語・単一民族であることを前提にした話である。ヨーロッパのようにその大多数が多民族・多言語国家である場合、そもそも「母国語」とはいったい何かということがすぐに問題になってしまうであろう。他方、一国一言語というイデオロギーの下で案出された「母国語」と異なり、「母語」は誰もが幼少時母親から自然に教わった言葉という

意味であるから、その内容は明確で、一見政治性も免れているように思われる。だが、私たちは本当に「母語」と呼ばれているものの同一性を無批判に信じてよいのであろうか。山本真弓は「コミュニケーション・スタイル」という概念を用いて、そのことの反証を試みる。

例えば日本語では、五歳児に向かって「あなたの名前は何か」とは言わず、「ぼく、名前は？」とたずねる。英語では同じ二人称の代名詞 you を使うしかないのであろうが、その表情や声の調子が大人に対する場合と同じであるはずがない。言葉そのものの表現だけでなく、その言葉をどんな態度をもって発するかということまで考えると、「ことばのスタイル」を変えるというのは実はごく普通にあらゆる言語で行なわれていることである。

以上のことからわかるのは、われわれはたくさんの「コミュニケーション・スタイル」を持っていて、それをさまざまな要因を考慮に入れて選択しているということである。・・・ここから、たとえば、家族の者と話すときに使う地域語と公の場で使う「標準語」の使い分けや、自分と同じコミュニケーション・スタイルで接近してくる初対面の人に対して抱く感情と、馴染みのないことば使いで語りかけてくる人への距離感の違いなども理解できるであろう。さらにいえば、家族の者と話すときに使う地域語と公の場で使う「標準語」と、どちらが自分の＜母語＞といえるのか、あるいはどちらも自分の＜母語＞だといえるのか、などといったことを考えていけば、日本社会に生きるわれわれもやはり、多言語のなかで生きているという事実突き当たるのである³⁾。

「母国語」というイデオロギー上の架空の存在が否定され、「母語」という人間のアイデンティティの基盤になるものまでが不確かなものになってしまうと、例えば先の英会話教室の講師に関する私たちの「ネイティブ」信仰の話も改めて議論する必要が

でてこよう。

*

日本人にとって「母語」話者である「ネイティブ」とは、普通対象となる言語の＜権威者＞のような存在であると考えられている。彼らが「私たちはそうは言わない」と言えば、それがどんなに文法的に正しい表現であっても間違いであるし、逆にどんなに文法的におかしい表現であっても、彼らが「私たちはそう言っている」と言えば正しい表現となってしまう。「ネイティブ」と呼ばれている人たちにも本当は個人差があって、英語を専門として勉強したような者もいれば、単にその言語が話されている地域で生まれたというだけの人もいるはずである。ところが、一旦彼らが日本に来ればそうした個人差がすべてなくなり、みんなが等しく「ネイティブ」と呼ばれる共通の立場に立って、その言語の＜権威者＞であるかのような役を演じることになるのだ。こうしたいわば偶像化は日本人の側の態度が問題なのだが、多和田葉子はそれについてこのように言う。

その権威は日本で抽象化された「西洋人」の偶像であり、その権威が、自分の言葉が「上手」かどうかを決めてくれる、という発想である⁴⁾。

ここでは「ネイティブ」が私たちの外国語の運用能力が「上手」か「下手」かを決定するということになっているのだが、そもそも言語にとっての「上手」「下手」とはどのようなことなのであろうか。これに関しては、先の山本真弓の言及が示唆に富んでいる。

言語能力について考えるとき、われわれの意識のなかでは「読む・書く・話す・聞く」が常にワン・セットになっている。そのため、われわれは、そのすべてにおいて＜できる＞のでなければ、ことばが＜できる＞ことにはならない、と信じている。しかし、それは＜多言語状況＞に生きる人び

との視点から見れば、一種の思い込みといってもよい。そして、そのような思い込みと、〈ひとつのことば〉というものが実際に存在しているという近代の言語観によって、われわれは、言語運用能力における「完璧」という状態があるかのような錯覚を抱いているといえるだろう⁵⁾。

日本のように限りなく「単一言語」に近い状態では〈ひとつのことば〉の实在が真実らしく思われるであろうが、多くの〈多言語状況〉ではあらゆる言語は連続性の中に存在するのであって、個々ばらばらに分離して数えることはできない。従って、〈ひとつのことば〉という完結した言語が存在しない以上、言葉の「完璧」な習得ということも当然不可能となる。ただ、話題や状況によって、あるいは相手によって、〈できる〉ことと〈できない〉ことの内容が絶えず変わってくるというだけである。ところで、このことは当然「ネイティブ」と呼ばれている人たちにも当てはまる。「ネイティブ」にも〈できる〉ことと〈できない〉ことあるのであって、「権威者」としての「完璧」を期待することは本来的に無理なのである。

日本における「母語」と「ネイティブ」の問題は、滞日の作家リービ英雄には言葉の「所有権」の問題として現れる。

ぼくはおそらく、ほとんど無意識的に、近代の日本人からはコトバをめぐる所有権の強いクレームを感じて、その所有権から自分が常に外されようとしているということも、最初に東京へ渡来してきた昭和四十二年から、四半世紀以上にわたって感じつづけてきたのかもしれない。向こう側から、つまり日本人として生まれた人たちから、日本語は「知っているのか、知らないのか」、「話せるのか、話せないのか」、「書けるのか、書けないのか」だけではなく、深層においては「所有しているのか、所有していないのか」の問題を絶えず突きつけられてきたような気がする。そしてこち

らが知っている、話せる、書けるということを示せば示すほど、向う側から、最後に、絶対に分けてくれないコトバの「所有権」が問題にされだしたのである。日本人として生まれた人たちといくら体験や感性を共有しても、人種を共有しない者にとって、日本語にはあくまでも「借地権」という条件が付いていたのである⁶⁾。

日本語は「母語」であり、「母語」話者である私たちはまさしく日本語「ネイティブ」なのであって、日本語に対する独占的な「所有権」を有していると固く信じている。白人の「ネイティブ」に西洋語の〈権威〉を脅迫的に感じたことの裏返しに、今度は日本語の「所有権」を意固地に外国人に向かって振りかざすのである。ただ、あらゆる言語が連続性の中に存在し、それをばらばらに分離して数えることはできないという事実を思い出せば、一体誰がどの言語を独占的に「所有」していると言えるのであろうか。日本語の「所有権」というのも、「母語」や「ネイティブ」といった概念と同様に、「一国家、一言語」を基本とする近代の言語学が作り出した一つのお話と考えるべきであろう。

*

英語の「母語」話者、つまり、「ネイティブ」に対する日本人の思い入れには特別のものがあったわけだが、それでは、英語が世界の「共通語」であるとか「国際語」であるとかの言説が、特に日本で盛んなのは私たちのどんな心性によるものであろうか。例えば、27ヶ国の加盟国を有するEU（欧州連合）では22言語を等しく域内の公用語として認めている。英語を唯一の共通語としてしまえば事は簡単なのだが、加盟国それぞれの歴史や文化の多様性を一貫して重視する政策をとるEUでは、それは論外のことと考えられている。22もの公用語をうまく機能させるのに要する通訳や翻訳家の数は4,000人に

上ると言われ、それに要する諸費用もまた莫大なものだが、それだけの犠牲を払ってでも英語への一極集中は避けたいのである。「一国家、一言語」を自明のこととしている島国日本では、私たちは多言語状況を肌身で体験する機会が全くなく、「国際語」があれば世界中でのコミュニケーションがすぐにも可能になるだろうと安易に考えてしまう。しかし、「国際語」は本当に世界中どこでも通じるものなのであろうか。

バンコクの屋台のおやじと＜国際語＞で話ができるのだろうか。子育てに追われている中国の農家の主婦と＜国際語＞で話ができるのだろうか。・・・イングランドで雑貨屋を営むイギリス人の店主は、毎日、＜国際語＞で誰とどんなことを話しているのだろうか⁷⁾。

こうした日々の言語活動の現場にあるのは、「どこでも通じる浅い英語のビジネス・トーク」(エクソ30)とは無縁の、「その場所にしかない奇妙な地方性」が濃密に現れてくる瞬間である。私たちは、「国際語」としての英語にどれほど過度の期待をしているのか。そもそもこの世界には、英語を知らない、あるいは英語を知らなくても何の不自由もないという人の方が圧倒的に大多数なのではないか。だからといって、そうした人たちの暮らしが全く無意味である、ということには絶対にならない。どのような場所にも、その土地とそこに暮らす人たちの文化や歴史があるのである。それを再認識し改めて言語化するには、英語に代表される「国際語」ではなく、その土地の言葉の方が相応しいのは言うまでもないことだ。多和田葉子とリービ英雄の二人は、それぞれ「母語」以外の言語世界の中に暮らすことを選択し、そこでの自らの体験をローカルの言葉で語り始めた最初の人たちである。彼らは国家と「母語」からの「越境」を試みるのだが、かといって「国際語」と呼ばれるものに安易に寄りかかることは決してしない。

*

日本語の「所有権」をなかなか譲ってくれぬ日本の閉塞的な状況に苦々しい思いを抱いていたリービ英雄だったが、それでも「越境」の意思を捨ててしまうことはなかった。それほどに、彼にとっての日本語との出会いは重要なものであった。1960年代の終わりにリービ英雄が初めて日本に来た時、「ぼくは子供でもなければ、大人でもなかった。」思春期の真っ只中に日本と出会ったことが、その後の彼の人生を決定づけることとなる。

東京の風景、日本の自然、日本人との関係、その中に流れている日本語という言葉にぼくは触れた。十七歳のころ、誰かの下宿に行き朝まで話し込んだことがある。十人のうち、ぼく一人だけが日本人ではなかった。話は一、二割しか理解できなかったが、黙って聞いていた。下宿の六畳間の空気の中で、言葉が形となって飛び交っているのが見えたような気がした。教科書の言葉ではなくて、感情を伴った言葉だった。これは何だろうと好奇心以上のものに衝き動かされた。これを自分のものにしたい思いにかられた。

それからは、喋れるようになるまでじっと日本語に耳を傾け、書けるようになるまでひたすら日本語を読んだ。二十年の月日が流れた。欲求不満がふつつと沸いてきて、ぼくの心のなかで発酵していた⁸⁾。

こうして始まったリービ英雄の作家活動だが、「母語」以外の言語で書くことの意味と可能性を、同じ「越境」の作家多和田葉子の言葉を引用しながら次のように語っている。

日本人の多和田葉子がドイツ語で小説を書き、「私はドイツ語の歴史をつくっている」と発言した。彼女のコメントを感動をもって読んだのは、ぼく一人ではなかったはずである⁹⁾。

さらに、別の箇所では次のようにも語る。

ぼくは、日本語の歴史の一部になりたかった。英語でも書ける内容を日本語で書くのではなく、日本語を書きたい、日本語をつくりたい、と思った¹⁰⁾。

日本語を「母語」とする多和田葉子が「ドイツ語の歴史」をつくり、英語を「母語」とするリービ英雄が「日本語の歴史」の一部になろうとしていた。

ある言語で小説を書くということは、その言語が現在多くの人によって使われている姿をなるべく真似するという事ではない。同時代の人たちが美しいと信じている姿をなぞってみせるということでもない。むしろ、その言語の中に潜在しながらまだ誰も見たことのない姿を引き出して見せることの方が重要だろう。その事によって言語表現の可能性と不可能性という問題に迫るためには、母語の外に出ることが一つの有力な戦略になる。もちろん、外に出る方法はいろいろあり、外国語の中に入ってみるというのは、そのうちの一つの方法にすぎない¹¹⁾。

多和田葉子にとって表現手段としての言語の可能性を考える時、「母語」からの脱出がまずその最初の一步であった。そのための手段が彼女の場合は、たまたまドイツ語であったということだ。それでは次に、あえて異国の言葉であるドイツ語で作品を書き続けることの必要性和必然性を彼女は考えているのであろうか。

わたしの書くドイツ語は、ドイツ人の書くドイ

ツ語とは違う。ちょっと抜けている、つまづきそうな、変なドイツ語なのだろうと自分では思っている。だからこそ書くかいがあるのではないかとも思う。わたしは<美しい日本語>を信じないので、もちろん<美しいドイツ語>も信じない¹²⁾。

多和田葉子はあえて「変なドイツ語」を書くことによって、<美しいドイツ語>に対抗しようとする。彼女の作品がドイツ人の慣習的な言語使用や感性に斬新な刺激を与えられるのであれば、確かに彼女の行為は「ドイツ語の歴史」を豊かなものにすることに貢献していると言えるであろう。他方、リービ英雄も「越境」の文学が日本語にとって有益なものであることを、次のように強調する。

さらに正確を期していえば、越境は、ある文化の外ににいる者にだけ起こるのではない。日本人として生まれた人でも、日本語を書くためには、一度、「外国人」にならなければだめなのだ。「当たり前な日本語」の「外」に立って、自分の言葉に異邦人として対する意識をもたなければよい作品は生まれない。これは、一流と呼ばれる日本の作家なら誰もが感じている今日的な表現の問題である¹³⁾。

多和田葉子とリービ英雄は「母語」の外に出て、それぞれの「外国語」で作家活動をおこなっている。両者に共通するのは、各言語の表現に新しい地平を切り開こうとする根源的で極めて現代的な試みなのである。

註

- 1) 多和田葉子『エクソフォニー——母語の外に出る旅』岩波書店、2003、p.11
- 2) リービ英雄『日本語を書く部屋』岩波書店、2001、p.161
- 3) 山本真弓『言語的近代を超えて——<多言語状況>を生きるために』明石書店、2004、p.141
- 4) 前掲書『エクソフォニー——母語の外に出る旅』p.10
- 5) 前掲書『言語的近代を超えて——<多言語状況>を生きるために』p.128

- 6) 前掲書『日本語を書く部屋』p.47
- 7) 前掲書『言語的近代を超えて——<多言語状況>を生きるために』p.294
- 8) 前掲書『日本語を書く部屋』p.160
- 9) 同上 p.162
- 10) 同上 p.164
- 11) 前掲書『エクソフォニー——母語の外に出る旅』p.9
- 12) 多和田葉子『カタコトのうわごと』青土社、1999、P.37
- 13) 前掲書『日本語を書く部屋』p.162